

令和元年度 京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書

本能寺跡出土品



2020

京都市文化市民局

令和元年度 京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書
本能寺跡出土品



本能寺跡出土品 鬼瓦・「能」字瓦



本能寺跡出土品 焼瓦



本能寺跡出土品 卒塔婆A群出土状況

ご 挨拶

京都市では、市域から出土した膨大な考古資料の中から、歴史的意義がきわめて高い出土文化財を市指定有形文化財として指定をすることで、長く未来へ残してゆく取り組みを続けてきました。公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、京都市からこの指定に先立つ準備業務の委託を受け、市指定有形文化財の候補となる出土文化財を整理し、その評価を行うとともに、多くの皆様に活用していただけるように目録を刊行して参りました。平成21年度から始まった本事業は11年目を迎え、全国から注目を集めています。

令和元年度の指定候補文化財は「本能寺跡出土品」です。本能寺は天文法華の乱の後、法華宗徒の追放が解除されて天文14年（1545）に帰洛した際、藤原実季（さねすえ）の邸宅跡でもあった平安京左京四条二坊十五町を購入して復興されました。北は現在の六角通、東は西洞院通、南は蛸業師通、西は油小路通に囲まれた区画です。

復興された本能寺は、京都法華宗の本山の一つとして栄えましたが、本能寺の変で寺域内の建物はほとんど焼失したと考えられます。京都市文化市民局、関西文化財調査会、古代文化調査会と当研究所が行った発掘調査では、平安時代から江戸時代までの多様な遺構を検出しました。全体的な寺院建物の復元には至りませんでした。区画溝や、天文法華の乱後の復興時と本能寺の変焼失後の整地層と廃棄土坑などを検出しました。

本指定の対象資料は、天文14年復興時から、本能寺の変で焼失するまでの土器陶磁器類・瓦類・卒塔婆等から構成されています。一般的に織田信長は華やかな文物を好むイメージを持っていますが、それとは裏腹に本能寺から出土した土器は日々の生活を支えるものが中心です。また焼瓦や焼壁は、歴史的な事象として語られる本能寺の変の荒々しさを如実に語る資料です。

ここに、その指定候補文化財の写真、実測図、一覧表を公開し、皆様にご紹介いたします。本書が広く活用され、京都の歴史研究の深化に資することができれば幸いです。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
所長 井上 満郎

例 言

- 1 本書は、令和元年度に公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が京都市から委託を受けて実施した、埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務の報告書である。
- 2 選定の対象とした出土遺物は、京都市内で実施された埋蔵文化財の発掘調査などで出土したもののうち、京都市が保管しているものである。
- 3 令和元年度の指定名称は「本能寺跡出土品」である。
- 4 本書使用の地図は、主として京都市発行「都市計画基本図（縮尺1：5000）」を参考に、必要に応じて加筆した。
- 5 本書の遺物番号は特に断らない限り指定番号である。また、一覧表の「報告書番号」は各発掘調査報告書での掲載番号である。
- 6 指定にあたっての諮問委員は以下の先生方に依頼した（五十音順／敬称略）
井上満郎、上原真人、瀧浪貞子、和田晴吾
- 7 本書の作成は、関広尚世、内田好昭が行った。
- 8 本書の巻頭図版に使用した遺物写真は村井伸也が撮影した。写真図版に使用した写真は主に関広尚世が撮影し、一部を村井伸也と株式会社文化財サービスが撮影した。
- 9 墨書資料の積読は、井上幸治（京都市歴史資料館）が行った。
- 10 指定準備作業と本書の作成には、下記の方々のご協力を得た（五十音順／敬称略）
家崎孝治、狭川真一、下坂守、平尾政幸、吉川義彦
- 11 焼壁片の蛍光X線分析は北野信彦氏（龍谷大学）が行った。
- 12 墨書資料の積文は、実測図に併記した。墨書資料の実測図には原則、表裏二面の赤外線画像を掲載した。

目 次

本編	1
第1章 本能寺の概要	3
1 成立と寺地の移動	3
2 規模と構造	4
第2章 発掘調査の概要	6
1 調査1 (関西文化財調査会)	6
2 調査2 (京都市文化市民局)	6
3 調査3 (京都市埋蔵文化財研究所)	10
4 調査4 (古代文化調査会)	10
第3章 指定対象出土品の抽出と概要	14
1 指定対象出土品の抽出	14
2 指定対象出土品の概要	14
1) 土器陶磁器類	14
2) 瓦類	15
3) 焼壁片	15
4) 木製品	15
5) 石製品	16
6) 金属製品	16
第4章 評価	17
附 編	19
本能寺跡出土壁土の分析調査 北野信彦 (龍谷大学)	21
文献目録	27
図版	29
一覧表	91

本 編



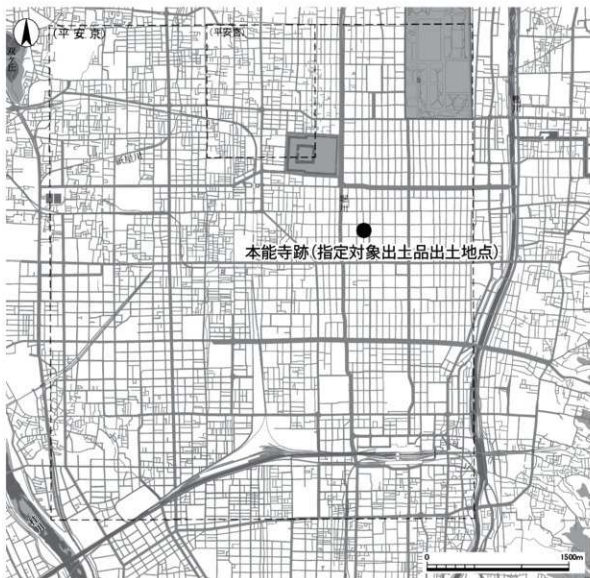


図3 指定候補文化財出土地点 (1:40,000)

与四条坊門、油小路と西洞院中間方四町々」に所在した本能寺跡の発掘調査において出土した遺物群である。

本能寺焼失後、同地において再建が試みられたが果たせず、天正19年(1591)豊臣秀吉の命により寺町御池の現在地へと移転した。なお、本能寺跡地は1町四方の旧寺城中央に南北方向の街路(現小川通)が設けられ、江戸時代には町屋が立ち並ぶ景観となった。

2 規模と構造

本能寺の敷地は、北を六角小路、東を西洞院大路、南を四条坊門小路、西を油小路に囲まれた方1町の区画で、平安京条坊では左京四条二

坊十五町に相当する。当該地は、『拾芥抄』『東京図』などから、平安時代後期に藤原^{ヨシトモ}実季の邸宅があったことがわかっている(山田1994)。

本能寺の寺城については、かつて上記寺城に南側の左京四条二坊十四町を加えた南北2町とする考えが存在した。18世紀に森幸安が描いた「中古京師内外地図」が最も早い例である。この影響によるものと思われるが、『京都坊目誌』は「東西洞院西油小路。南錦小路北六角に至り」と南北2町説を採用し、後の地誌に影響を及ぼした。京都市編『京都の歴史』4の付図も同様に本能寺の寺城を南北2町としている。しかし、上述した「天文一四年六月四日付沢村千松売券案」は本能寺が沢村一類から買い取っ



図4 『上杉本洛中洛外図屏風』本能寺部分（米沢市上杉博物館蔵）

た寺地を明確に「六角と四条坊門、油小路と西洞院中間方四町々」としているし、後述する調査3において四条坊門小路の北側に本能寺の南限とみられる濠が確認されたことから、本能寺の寺域は四条坊門小路を南限とする1町四方と考えるのが妥当である。

本能寺の堂舎の配置については不明であるが、『上杉本洛中洛外図屏風』には、瓦葺の建物2棟と板葺の建物2棟が描かれている。『上杉本洛中洛外図屏風』の景観年代は信長入京以前となるため、こうした景観の中に信長の屋敷が新たに普請されたものであろう。また、明智方の武将による本能寺の変の記録である『本城惣右衛門覚書』には、本能寺の施設として「ほり」「もん」「だう（堂）」「ひろま」「くり」などが記されている。また『信長公記』には、天正8年（1580）に村井貞勝に「御普請」させたものと思われる「御殿」のほか、「面御堂」、「御厩」、「御台所」などの記載が見え、本能寺内の建物構成がある程度推定できる（河内2018）。



図5 調査位置図（1：2,000）

第2章 発掘調査の概要

今回の指定対象出土品は、2007年に関西文化財調査会が実施した調査1、2007年に京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した調査2、2007年に財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した調査3、2012年に古代文化調査会が実施した調査4で出土した(図5)。各機関の調査概要と指定対象出土品が出土した遺構の概要は下記のとおりである。

1 調査1(図6~8)

調査1は関西文化財調査会が、2007年7月から8月にかけて西洞院通に面する地点で行った調査である。調査区はA~I区の9箇所に分かれ、調査面積は延べ181㎡である。西洞院川と考えられる溝22、溝22を埋めた整地層、寺域内を区画する溝と考えられる溝21と溝50、本能寺の変に伴う瓦溜や土器溜などが検出されている(吉川2008)。

指定対象となったのは土器群31、溝21、溝50、土器群52から出土した遺物である。

土器群31は、本能寺建設時の整地層(第4層)の下部で、掘り込みを伴う遺構ではないが土器が散乱していることが確認された地点である。また、調査者によると4層上面には17世紀の土器が堆積していたという。

溝21は東西方向の溝である。西端では幅約6.6mで、E区とG~I区で12.5m分を検出した。深さは一番深いところで約2.5mである。最下層には黒褐色と青灰色の泥土が堆積する。土師器、施軸陶器、輸入陶磁器、卒塔婆、下駄などが出土した。焼土や瓦は少ない。なお、指定対象とはしていないが、獣骨が出土している。

溝50は南北方向の溝である。幅3m分、長さ8.5m分を検出した。深さは約1mである。西肩部に石垣51を検出している。溝50は、大量の

焼瓦と焼壁を含む層で埋め戻され、本能寺の変後の整地によるものと考えられる。ここから「觥」の字を刻んだ軒丸瓦や鬼瓦が出土している。土器群52は、溝50の土師器が集中して出土した部分である。

なお、溝21と溝50は両遺構の間が攪乱坑で壊され、先後関係等が不明である。報告書では、溝21の層8と層9が、溝21と溝50が交差する地点で同一の様相を示すことから、両遺構が同一遺構である可能性があるとし、これを天正8年(1580)に造営が開始される信長御殿に伴うL字溝と推定している。また、これを積極的

に評価する議論も存在する(今谷2008)。他方、溝21は卒塔婆や下駄を含む泥土、溝50は瓦と焼壁片と両遺構の堆積土の状況が大きく異なること、出土する土器群に年代差がみられることを根拠に、これを疑問視する意見もある(森島2009)。先述のとおり、溝21埋土からは卒塔婆が出土していることから、本能寺建設後に同遺構が開削されたと考えられる。

2 調査2(図9)

調査2は京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して、2008年8月から9月に寺域の中央部北西寄りで行った調査である。調査区は東西約17m、南北約6mである。調査面積は、約100㎡である。本能寺期の礎石根固め(土坑46・49・98)、雨落溝や区画溝の可能性のある溝28などが検出されている(山本2008)。

指定対象出土品は、土坑6、土坑26、土坑52から出土している。

土坑6は楕円形もしくは長方形の土坑で、北東・西側は攪乱を受け、南側は調査区外へ続く。南北0.6m、東西1.8m分を検出した。深さは約0.4mある。埋土から、焼土や炭とともに多量の土師器が積み重なった状態で出土した。

土坑26は円形と思われる土坑で、北側は調査区外へ続く。直径は約1.4m、深さは約0.8mあ

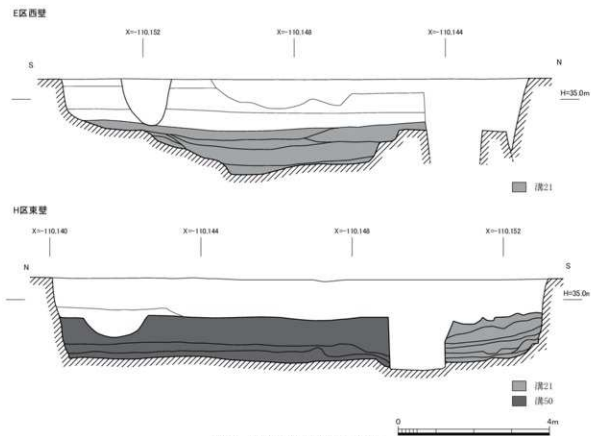


図7 調査1断面図(1:100)

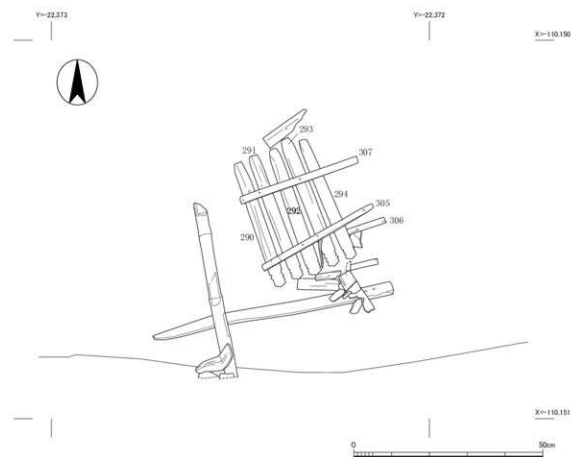


図8 卒塔婆A群出土状況図(1:10) *数字は遺物番号

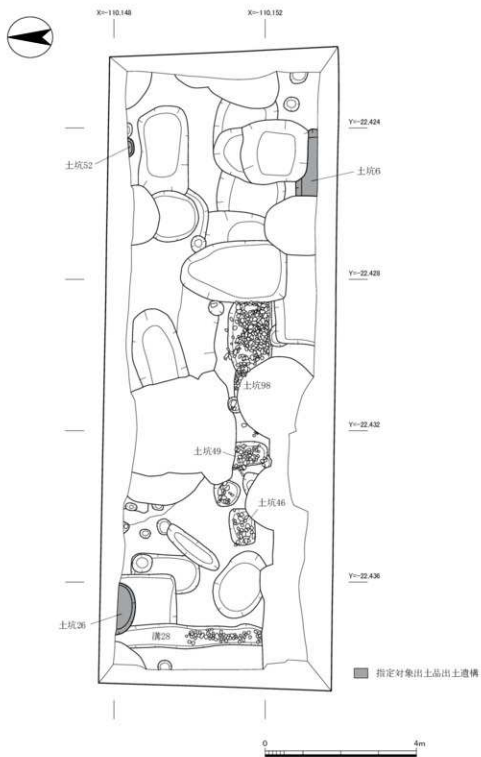


図9 調査2平面図 (1:100)

る。埋土から、焼土や炭とともに多くの瓦が出土した。瓦には「蝕」の字を表す軒丸瓦、火を受け赤変した平瓦・丸瓦がある。

土坑52は円形の土坑で、北側は調査区外へ続く。直径約0.5m以上に復元でき、深さ約0.1m以上ある。埴が1点出土している。

3 調査3 (図10)

調査3は財団法人京都府埋蔵文化財研究所が、2007年12月に寺域の南東隅で行った調査である。平安京条坊の復元モデル上の位置では西洞院大路の路面上にあたる。調査区は東西2m、南北5mである。調査面積は10㎡である。この調査では、西洞院川の堆積とそれを埋めた16世紀の整地層、本能寺南限の濠と思われる溝4を検出した(平尾2008)。

指定対象となったのは西洞院川を埋めた整地層と溝4から出土した遺物である。

整地層は、厚さは約1.0mである。0.05～0.15m程度の層が多数重なる。下層には礫を含む固くしまった面があり、整地が何度も繰り返されたことがわかる。

溝4は東西方向の濠である。北肩を検出し南肩は調査区外である。幅1.3m以上あり、長さ約1.8m分を検出した。深さは1.05mある。

4 調査4 (図11・12)

調査4は、古代文化調査会が、2012年3月から5月にかけて寺域の北東隅部で行った調査である。調査区はL字型を呈し、東西は北端部11.5m、南端部16.5mで南北22mである。調査面積は288㎡である。西洞院川、寺域の東限を示す塀跡などを検出している(家崎2012)。

指定対象出土品は西洞院川跡の溝411、本能寺に先行する東西方向の溝193と溝230(以上第5面)、本能寺の変以前の整地層③、土坑346(第3面)、本能寺の変後の整地層②から出土した遺物である。

溝411は南北方向の溝で、西洞院川に該当す

る。幅2～2.5m以上あり、東肩は調査区外である。第10・11層は16世紀前半の土器を含み、その上層では16世紀後半にかけての土師器皿も含むことから、西洞院川の西肩を埋めて整地したことがわかる。

溝193は東西方向の溝で、幅は2.5m、深さ0.3mである。調査区内の西洞院通との境界をなす塀跡付近で東端が確認でき、西側は調査区外に延びており、長さ4.5m分を検出した。同溝は、溝230を介して西洞院川跡(溝411)につながる。溝230は、幅0.4m、深さ0.35m、長さ約3mである。南北方向の塀跡を貫いて溝411につながるため、「暗渠」跡と報告されている。なお溝193最下層からは、16世紀前半の土師器皿や瓦器羽釜が出土した。

整地層③は、その下層の整地層④が本能寺建立時の整地層と考えられることから、信長御殿造営時の整地層と推定される。厚さは0.25m程度である。

土坑346は直径約1mの円形土坑で、掘形内から五輪塔火輪1点が出土した。

整地層②は、本能寺の変後の再建時の整地層である。

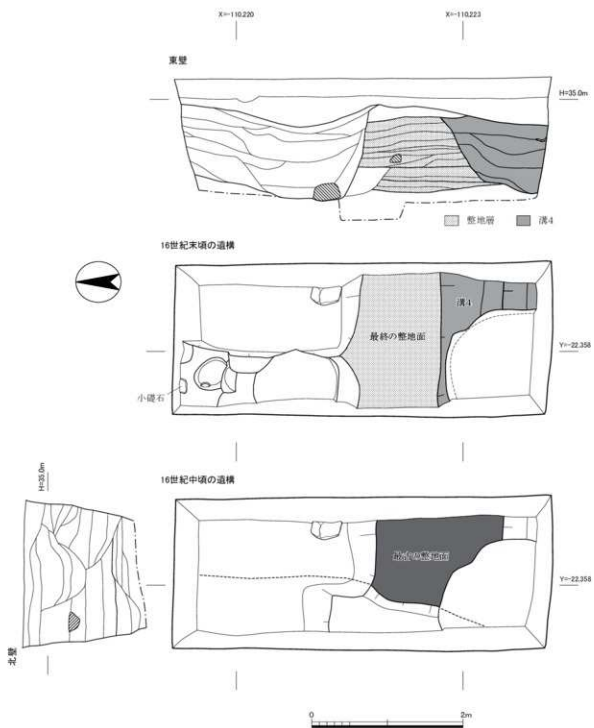


図10 調査3平面図・断面図 (1:50)

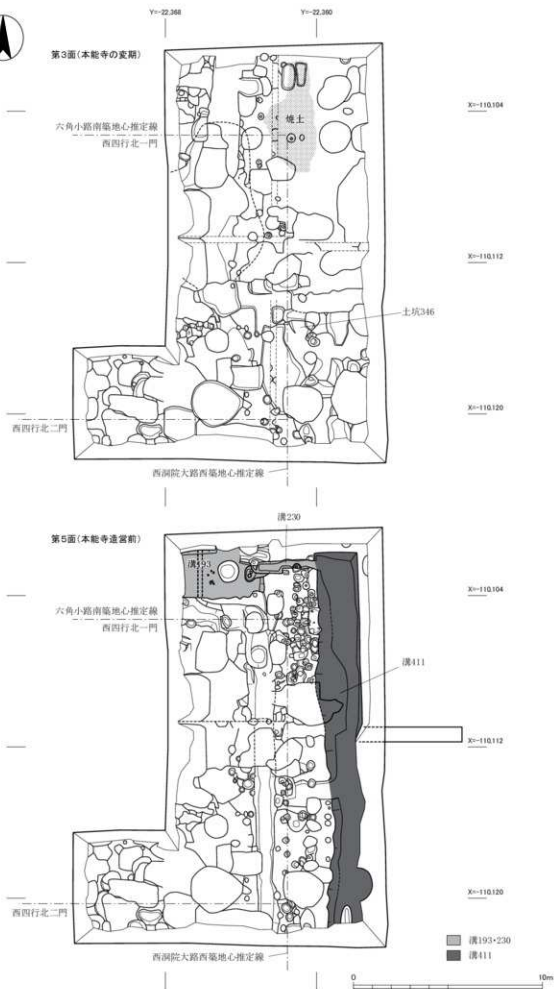
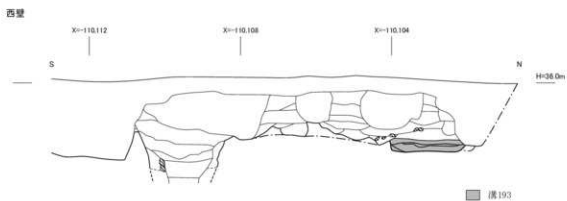
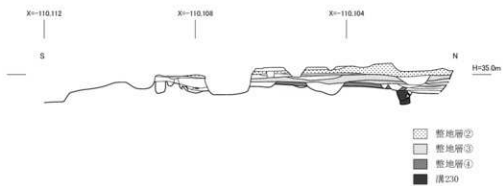


図11 調査4平面図(1:200)



南北断面 (Y=22.362ライン)



東西断面 (X=110.112ライン)

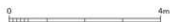
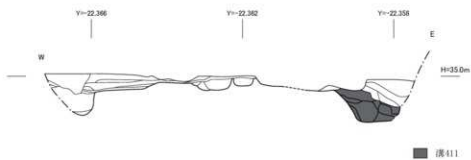


図12 調査4断面図 (1:100)

第3章 指定対象出土品の抽出と概要

1 指定文化財の抽出

今回指定対象となった本能寺跡出土品は、著名な歴史的事件である「本能寺の変」の考古学的証拠となる貴重な資料である。指定対象の選定にあたっては、既に調査報告書に掲載されている資料を中心に選定したが、調査報告書に掲載されなかった資料の中からも新たに抽出した。指定対象出土品は大きく、天文14年(1545)の本能寺造営期の資料、天文14年から天正10(1582)の本能寺の変までの本能寺期及び信長御殿期の資料、本能寺の変での焼失期の資料からなる。なお、丸瓦、平瓦、道具瓦は2辺が残存する資料を抽出した。焼瓦は最大長10cm以上の資料を、焼壁片は最大長5cm以上の資料を抽出した。総数は319点で、土器陶磁器類147点、瓦127点、焼壁片15点、木製品24点、石製品3点、金属製品3点からなる。

2 指定文化財の概要

1) 土器陶磁器類

1と2は、調査4の溝411の第10層から出土した土師器皿である。底部が内側に突起するいわゆるへそ皿である。溝411は西洞院川跡とみられ、上部は16世紀の整地層で埋められている。明らかに本能寺期に先行する時代の特徴を持ち、本能寺の移転再建以前の資料である。

3～11は調査3の整地層から出土した土器陶磁器類である。3～9は土師器皿である。10・11は国産施軸陶器で、10は古瀬戸鉢、11は古瀬戸皿である。16世紀中頃から後半の特徴を示す。本能寺造営期から焼失期までの資料を含むと思われる。

12～24は調査4の溝193から出土した土器陶磁器類である。12～16は土師器皿である。17は中国製の青磁碗である。18～24は瓦器羽

釜である。溝193は上部を本能寺造営時の整地層に覆われるため、本能寺造営前の資料である。

25～45は調査1の土器群31から出土した土師器皿である。土器群31は本能寺造営期の整地層の直下で検出されており、本能寺造営前の資料である。

46～54は、調査1の溝21から出土した土器陶磁器類である。46～50は土師器皿である。51・52は国産施軸陶器で51は古瀬戸香炉、52は古瀬戸皿である。

53・54は輸入磁器である。53は染付碗で、呉須で草花文が描かれる。54は青磁碗で櫛描文が施される。溝21は、後述する卒塔婆群が出土していることから、本能寺期のものであることが明らかである。土器型式から本能寺が造営された直後の資料と思われる。

55～87は調査1の土器群52から出土した土師器皿である。土器群52は、溝50の埋土内で焼瓦・焼壁片の間から出土した土器群である。

88～97は調査1の溝50から出土した土器陶磁器類である。88～96は土師器皿である。97は輸入磁器染付碗である。呉須で草花を描く。やや古い時期の土師器皿が混じるが、16世紀後半の資料である。

98～132は調査2の土坑6から出土した土師器皿である。土坑6からは焼瓦や焼土が出土しており、本能寺の変後の遺構である。

133～140は調査2の土坑26から出土した土器陶磁器類である。133～138は土師器皿である。139は朝鮮製施軸陶器碗の口縁部小破片である。140は備前産の摺鉢である。土坑26からは焼壁片や焼瓦が出土しており、本能寺の変後の遺構である。

141・142は調査3の溝4から出土した土器陶磁器類である。141は土師器皿である。142は古瀬戸鉢である。16世紀後半の資料である。溝4は、本能寺南限の濠跡とみられる

143～146は調査4の溝411から出土した土

師器皿である。本能寺期の遺物とみられる。

147は調査4の整地層②で出土した白磁碗である。底部外面に○内に「大」とする朱書きがある。

2) 瓦類

148・149は有孔罇である。調査1の溝21から出土した。

150～204は調査1の溝50及び溝50内の土器群52付近で出土した瓦類である。150～153は鬼瓦である。150は額に輪宝を飾る。151は左目部分、152は右目部分である。153は剣に巻き付く龍を浮き彫りにする。154～168は軒丸瓦である。154～160は瓦当面に「触」字を飾る。161～165は右巻の巴文軒丸瓦である。162は圏線内に△文がある。166～168は左巻の巴文軒丸瓦である。169～171は鳥舎で「触」字(169・171)と右巻巴文のもの(170)がある。172は内面に吊り紐痕が残る使用箇所不明の道具瓦である。173～178は丸瓦である。内面に吊り紐痕、コビキ痕、布目が残る。コビキは全てAである。(森田1984)

179～194は軒平瓦である。179～183は中心に三葉を配し、左右に独立した唐草文を配する。193・194も同様の文様と思われる。189・192は同様の唐草文であるが唐草の向きが逆である。192・193は三葉の中心飾り、189は中心飾りを欠く。184～187は中心の三葉上にさらに飾りのある文様を配し、左右に連続して巻き込む唐草文を配する。中心飾りは不明だが、188も巻き込みが強い同系統の唐草文である。190は、中心飾りは不明だが、巻き込みが弱い独立した唐草文である。191は中心に宝珠を配し、左右に単独の唐草文を配する。195～199は平瓦である。

200～204は平瓦で、いずれも焼瓦である。

205～273は調査2の土坑26から出土した瓦類である。205は軒平瓦である。中心飾りは不明だが、巻き込みの強い独立した唐草文であ

る。206～209は報告書で同一番号報告されていたが、本指定では別番号とした軒丸瓦である。206～208は、「触」字を飾るもの、209は瓦当を欠いている。210は面戸瓦である。211～213・216は平瓦である。平瓦の中には湾曲が浅く、ほぼ扁平の形状を呈するものもあることから、熨斗瓦として用いられたものが含まれている可能性もある。214・215は丸瓦である。凹面に吊り紐痕、コビキ痕、布目が残る。コビキはAである。217～273は焼瓦である。

274は調査2の土坑52で出土した罇である。

3) 焼壁片

275・276は調査4の整地層③の上面から出土した焼壁片である。他のものに比べ赤化が弱く脆い。

277～280は調査1の溝50から出土した焼壁片である。281～289は調査2の土坑26から出土した焼壁片である。275・276以外はよく焼き締まる。いずれも目視では漆喰上塗り等の化粧痕跡はない。上塗りの有無の確認のため、上記15点について蛍光X線分析を行った(附編参照)。その結果、通常の土壌成分のみが検出され、石灰等のカルシウム成分の強いピークが検出されず、上塗りのない通常の土壁であることが判明した。なお、280からは鉛成分が検出され、その範囲から直径10mm程度の鉛製品が被熱・溶着していた可能性がある。

4) 木製品

290～304は卒塔婆、305～311はそれに伴う横木である。調査1の溝21から出土した。290～296は「報告書」でA群とされている7基で、うち290～294の5基が横木に釘で止められた状態で出土した。297～303は「報告書」でB群とされている7基で、うち297～302の6基が横木に釘で止められた状態で出土した。304は単独で出土し、A・B群とは型式も異なる。「報告書」では卒塔婆Cとされている。横木

は305と306、307と308、310と311が組み合うもので、2本で両面から卒塔婆を挟んでいたものである。釘穴の数から7本の卒塔婆を連ねていたものであろう。いずれも表の面に「南無妙法蓮華經」と題目を墨書する。また、290裏面の「若生人天中〔 〕」の墨書は『妙法蓮華經』「提婆達多品第十二」にある「若生人天中受勝妙樂」とみられ、291裏面の「心生大歡喜□□□□□」の墨書は『妙法蓮華經』「方便品第二」にある「心生大歡喜自知当作仏」とみられることから、裏面には総じて『妙法蓮華經』の一節がそれぞれに墨書されていたものと思われる。また、304は、表面に梵字「キリーク・サ・サク」と「三界萬靈十萬□□」が記され、その下に施主名と思われる「□□□眷属須〔

〕」が、裏面に真言が漢字で墨書されている。焼壁片・焼瓦などを伴わずに出土しており、本能寺の変以前に境内で行われた供養等に用いられたものと考えられる。

312・313は下駄である。312は台と歯が一木で作られている「連歯下駄」、313は台に歯を差し込む「差歯下駄」で、歯部を欠く（秋田2002）。313はよく使い込まれたものとみられ、摩耗が進み台の上部が足裏の形状にくぼむ。いずれも漆塗りの痕跡はない。普段履きとして寺城内または近隣で用いられたものと考えられる。

5) 石製品

314は調査3の溝4から出土した石材片である。花崗岩製で平らな二面を残し、他は不整形のままである。基壇状の外構に用いられたものであろう。

315は調査4の土坑346から出土した五輪塔の火輪である。花崗岩製である。

316は調査4の溝230から出土した硯である。

6) 金属製品

317～319は銭貨である。317は調査4の整地層②から出土した。1086年初鑄の元祐通寶である。318は調査4の整地層③から出土した。1078年初鑄の元豊通寶である。319は調査4の整地層②から出土した。1056年初鑄の嘉祐通寶である。

第4章 評価

土器陶磁器類は、まず土器型式に年代の示準を与える資料として評価できる。本能寺造営直前の資料として調査4の溝193、調査1の土器群31出土のもの、本能寺期の資料である調査1の溝21出土のもの、本能寺焼失直後の遺構である調査1の溝50内の土器集中部52、調査2の土坑6と土坑26の出土資料などからなり、16世紀半ばから後半までのそれぞれ良好な一括資料群といえることができる。また、これらの土器陶磁器類は、京中寺院や武家屋敷の生活を表すという側面もある。高級品は少なく、土師器皿などの日常容器が中心である点が特徴的である。

瓦のうち、調査1の溝50、調査2の土坑26出土資料は、本能寺の変で被災した建物に葺かれていた瓦群として評価できる。これらの瓦群は主に天文14年(1545)の造営期の本能寺所要瓦と天正8年(1580)から普請される信長御殿所要瓦からなるものと考えられる。154・160・169・171・206・208の「𠄎」字軒丸瓦・鳥衾については、寺号瓦であることから信長新造の御殿所要瓦ではありえず、本能寺移転再建期の軒丸瓦であろう。また、188と191の軒平瓦は凹型圧痕や瓦当下縁に面取りが見られるなど技法的に古い特徴を示すことから、これも本能寺造営期の瓦とすることができるという(鈴木2019)。また、「△」の陽刻がある巴文軒丸瓦162は製作年代が明らかになっている二条殿御池城跡から出土した軒丸瓦と、巴文頭部付近にある△の陽刻や4か所の范傷が一致することから同范であることが明らかになっている(松井1984・山口2018)。二条殿御池城跡は、天正4年(1576)から普請されるこれも信長御殿である「二条殿御屋敷」の遺跡であり、162は信長御殿所要瓦とみてよい。また、二条御屋敷は本能寺の信長御殿と同じく村井貞勝が普請を担当しているため、同様のルートで瓦の調達がなされたことも指摘できよう(山口2018)。山口

誠司氏によれば、これ以外にも、軒平瓦190は二条殿御池城跡出土瓦と同系、軒丸瓦168は本能寺信長御殿と同時代の勝竜寺城跡出土瓦と同范、軒平瓦179も勝竜寺跡出土瓦と同系であり、これらが信長御殿所要瓦を構成するとみなせよう(山口2018)。

『信長公記』には、天正8年(1580)2月26日条に「本能寺に御座を居ゑらるべきの旨にて、御成りあつて、御普請の様子、村井春長軒(貞勝)に仰せ付けらる」とあり、上述の同范・同文関係を考慮すると、貞勝の差配で同一の工人集団が関与していた可能性が高い。

卒塔婆は、7本を横木で1組の状態にし、それが2組出土した。この形態は、初七日から四十九日の供養に関連するもの、もしくは小堂の周囲に建てられていたものと考えられる。また、卒塔婆304には梵字と「三界萬靈」の墨書が見え、これも追善供養に関わるものである。この時期の京中寺院と檀家町衆の信仰の実態や境内景観を知り得る資料として評価できよう。

以上から、本指定の遺物は、中世の京中寺院と信長御殿の実態を示し、本能寺の変の物的証拠となるものといえ、貴重な文化財として評価できるものである。

本能寺跡出土壁土の分析調査

北野 信彦 (龍谷大学)

1. 調査方法

① 拡大観察

調査対象の表面状態の拡大観察は、(株)スカラ製のDG-3型デジタル顕微鏡を用いて50倍の倍率で拡大観察した。

② 無機元素の定性分析

調査対象資料の構成無機元素の定性分析は、まず(株)リガクのNiton XL3t-700携帯型のエネルギー分散型蛍光X線分析装置を調査対象箇所注意深く近接させて大気中で分析した。設定条件は、測定視野は直径8.0mmスポット、管球は対陰極Agターゲット、管電圧は15kV～40kVの切替操作、大気圧で分析設定時間は60秒である。引き続き壁土資料の構成無機元素に関する詳細な定性分析を行うために、(株)堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置を使用した。設定条件は以下の通り。分析時間は600秒、試料室内は真空、X線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240 μ Aおよび20 μ A、検出強度は200.0～250.0cpsである。

2. 調査結果

① 本調査では、合計15点の壁土に観察と無機元素の分析を実施した。この調査の目的は、被熱を受けて赤色化している壁土の状態やササの混和状況を拡大確認すること、さらには壁土が単なる土壁であるのか、壁表面に漆喰などの化粧土を塗りこめた痕跡があるかを確認することである。

② 各資料の表面観察を行った結果、藁ササや萱ササなど若干それぞれ異なる草本類の茎を刻んで練りこんである状況が確認された。さらに明らかに800℃以上の被熱を受けた赤色化が確認されたが、これは壁土に含まれた鉄(Fe)成分が酸化した結果である。分析調査において

も、いずれの資料からも強い鉄(Fe)成分のピークが検出された。それ以外では、シリカ(Si)の外、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)のピークが検出されており、通常の土壌の粘土成分であった。

③ 各土壁資料は、いずれも表面・裏面・側面などで構成されていた。当初の目的のように壁表面に漆喰などの化粧土を塗りこめた痕跡が存在するならば、石灰などのカルシウム(Ca)成分がリッチな箇所がいずれかの面から検出されなければならない。ところがいずれの資料についても複数箇所の蛍光X線分析調査を実施したものの強いカルシウム(Ca)のピークが検出されず、表面・裏面・側面のどの面についても同質の無機元素の構成要素であった。そのため本資料群については、いずれの資料も漆喰などの化粧土はほどこされておらず、通常の土壁であると判断した。

④ その一方で、本資料群の中で特徴的な資料は、280である。他の資料でも、微量ではあるが表面などの一面に鉛(Pb)成分のピークが検出されるものもあった。そのなかで280のみは、一面だけ鉛(Pb)成分のピークが極めて強く検出されるとともに、合金であれば融点を下げるための効果があるスズ(Sn)成分も若干含まれる箇所も一部で確認された。表面観察および拡大観察した結果、この鉛(Pb)リッチの箇所は直径15mm程度の円形を呈しており、何らかの円形の鉛素材が被熱を受けて溶着している可能性が高いと理解した。

⑤ この箇所には青銅製品もしくは鉛ガラス製品が存在したのであれば銅(Cu)成分のピークが鉛(Pb)成分のピーク以上に検出されるとともに、ガラス質であれば拡大観察においてもその状況が観察されなければならない。ところがこ

の箇所からは銅 (Cu) 成分のピークは殆ど検出されなかった。さらに、ガラス質の溶着も顕著に観察されないため、このような青銅製品や鉛ガラス製品ではないと思われる。

そのため、この箇所には鉛製の10mm程度の

何らかの丸い鉛製品の痕跡が壁土表面に付着している可能性が高い点が指摘された。

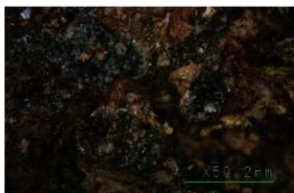
図版一覧



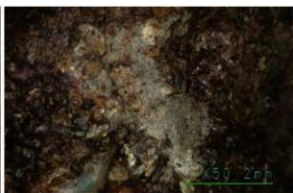
280-1



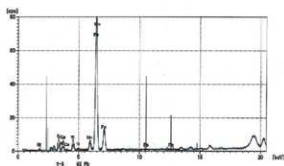
280-2



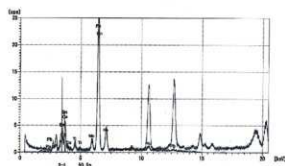
280-1



280-2



280-1



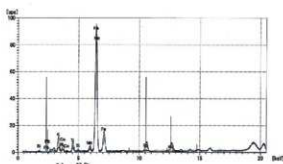
280-2



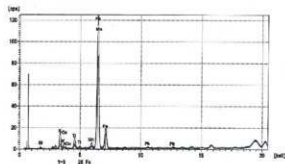
285-1



285-2



285-1



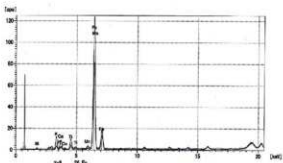
285-2



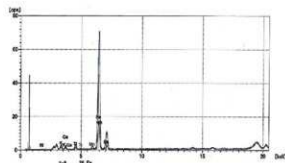
282-1



282-2



282-1



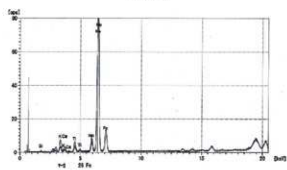
282-2



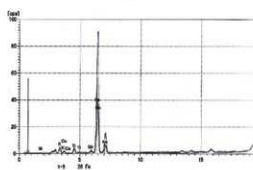
277-1



277-2



277-1



277-2

分析一覽

資料	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Zn	Pb	Sn
275-1	1264	10.3K	8960	2548	978	18.9K	67	96	18	
275-2	1003	12.5K	17.6K	3846	429	18.1K	76	89	22	
275-3	1059	9342	7772	2113	844	17.9K	79	76	31	
275-4		19.7K	5308	4585	926	26.2K	50	94	23	
275-5	496	11.4K	4727	2690	856	30.8K	83	100	29	
276-1	1368	20.5K	7988	5457	830	27.1K	86	92	22	
276-2	892	14.8K	16.6K	3531	677	23.1K	91	101	25	
276-3	842	13.2K	20.6K	3530	761	25.2K	96	120	21	
276-4	564	18.7K	10.6K	4125	2626	30.2K	104	107	19	
276-5	409	17.2K	3785	4048	1821	17.7K	62	90	24	
277-1	1742	18.2K	3455	4844	966	36.9K	66	112	43	
277-2	484	20.0K	3686	5236	7303	40.9K	64	105	37	
277-3	658	16.5K	2543	4575	955	38.8K	80	137	43	
277-4	438	14.5K	2316	3694	982	35.1K	49	111	28	
278-1	1639	26.4K	5785	6368	1452	35.8K	69	119	450	
278-2	760	17.8K	4031	4423	821	34.6K	81	120	79	
278-3	1163	24.5K	5688	5515	1663	32.5K	76	134	1186	
278-4	876	19.0K	4228	4527	1402	30.8K	82	109	738	
278-5	1131	18.7K	3506	4245	1356	30.4K	83	99	788	
279-1		23.8K	7069	5848	1126	34.5K	158	151	29	
279-2	502	20.5K	6902	5156	535	28.0K	385	125	70	
279-3	576	8342	2764	2035	1317	31.6K	90	95	31	
279-4	713	25.8K	5085	6202	789	32.6K	92	109	30	
279-5	491	22.1K	6264	5919	1417	32.1K	122	133	27	
280-1	743	19.2K	7302	4368	2509	32.6K	75	147	54	
280-2	1156	24.0K	7439	6133	2252	37.6K	87	159	65	
280-3	699	15.0K	3682	3767	1441	35.0K	75	125	35	
280-4	1470	19.7K	6545	4633	2136	38.3K	105	143	3349	
280-5	4105	31.8K	18.9K	2933	2566	39.2K	251	198	12.6K	29.4K
280-6	4799	20.6K	11.8K	2942	2645	32.8K	129	157	10.9K	5751
280-6	1567	4231	1935	610	1763	19.2K	113	106	12.4K	3038
280-8	4906	25.9K	11.0K	3055	2454	26.2K	91	121	12.5K	2583
281-1	778	13.1K	2779	3285	1351	28.2K	53	122	385	
281-2	937	21.0K	4734	4885	1620	33.2K	71	157	475	
281-3	628	21.5K	5470	5369	1098	34.3K	69	135	434	
281-4	345	14.2K	2856	3247	957	31.7K	60	100	94	
282-1	1185	26.6K	11.1K	6490	878	38.7K	76	131	606	
282-2		17.9K	4786	4712	1797	34.8K	81	116	25	
282-3	834	21.3K	7928	5652	713	34.4K	59	109	326	
282-4	1006	19.9K	4906	5194	962	31.8K	73	80	884	
283-1	408	19.5K	2797	4598	1083	31.3K	61	96	34	
283-2	946	19.4K	4394	4721	888	34.0K	65	84	27	
283-3	708	33.3K	7011	7467	912	38.7K	106	122	200	
284-1	2383	21.7K	4548	4597	892	33.3K	70	188	2109	
284-2	1071	12.9K	3069	3043	1918	31.4K	69	150	247	
284-3	1476	27.2K	5982	6339	1756	36.3K	81	171	202	
285-1	2646	24.9K	4768	4455	1156	33.4K	79	220	2854	
285-2	2749	25.8K	6309	5215	2331	25.8K	55	224	2558	

資料	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Zn	Pb	Sn
285-3	2236	23.1K	4584	4159	1249	33.0K	81	207	3011	
285-4	982	30.6K	6049	6346	812	34.2K	61	141	295	
285-5	1435	29.5K	4776	7073	743	32.8K	54	133	297	
286-1	2258	14.8K	3943	2511	490	12.2K	32	43	158	
286-2	2814	37.3K	15.6K	5015	1520	33.4K	100	146	4192	
286-3	1062	13.3K	4690	2676	4142	35.3K	65	102	1004	
286-4	977	13.9K	4844	3306	3683	40.8K	127	156	1027	
287-1	1102	26.7K	5681	5730	1515	30.9K	91	129	1099	
287-2	1456	23.6K	4430	5214	1493	34.5K	62	126	1024	
287-3	1154	25.8K	5911	5391	1471	37.4K	103	126	1089	1456
287-4	966	13.7K	3943	2656	1064	30.0K	107	114	812	
287-5	1498	22.3K	5324	5123	1254	35.4K	78	123	669	
288-1	804	23.6K	5762	6092	708	34.1K	74	104	415	
288-2	1232	24.0K	8448	5906	860	33.9K	62	98	575	
288-3	964	24.0K	5291	5377	779	38.6K	82	125	1466	
288-4	873	25.7K	6571	6112	628	32.3K	79	113	581	
289-1	1048	22.3K	6476	4914	2150	34.3K	97	91	36	
289-2	1351	22.6K	6421	4930	2143	35.0K	99	91	33	
289-3	1581	24.2K	7132	6077	1164	34.5K	61	121	71	
289-4	892	21.1K	6183	5000	1812	32.7K	92	141	89	
資料	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Zn	Pb	Sn

文献目録

- ・ 秋田裕毅2002『下駄 神のはきもの』ものと人間の文化史104、法政大学出版局
- ・ 家崎孝治2012『本能寺城跡—平安京左京四条二坊十五町一』古代文化調査会
- ・ 市田京子2000『江戸時代の下駄』江戸遺跡研究会編『江戸文化の考古学』吉川弘文館、26-54頁
- ・ 今尾文昭1996『東大寺三社池—史跡東大寺旧境内の発掘調査—』奈良県文化財調査報告書71、奈良県立橿原考古学研究所
- ・ 今谷明2008『信長の本能寺“御殿”について』今谷明編『王権と都市』思文閣、72-92頁
- ・ 岩崎誠ほか1991『勝龍寺城跡発掘調査報告』長岡京市埋蔵文化財調査報告書6、長岡京市教育委員会
- ・ 奥野高広・岩沢恩彦校注1969『信長公記』角川書店
- ・ 河内将芳2008『中世本能寺の寺地と立地について—成立から本能寺の変まで—』『立命館文学』609、30-43頁
- ・ 河内将芳2013『日蓮宗と戦国京都』淡交社
- ・ 河内将芳2018『宿所の変遷からみる 信長と京都』淡交社
- ・ 川勝政太郎1980『梵字講話』河原書店
- ・ 京都市編1969『京都の歴史』4、学芸書林
- ・ 京都市編1985『史料 京都の歴史』9、平凡社
- ・ 鈴木久史2019『京都における織豊期の造瓦の様相—京都市内を中心に—』『織豊期城郭研究会』1-23頁
- ・ 高橋康夫1998『洛中洛外 環境文化の中世史』平凡社
- ・ 平尾政幸2003『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-5、(財)京都市埋蔵文化財研究所
- ・ 平尾政幸2006a『本能寺の変遷』リーフレット京都211、(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館
- ・ 平尾政幸2006b『本能寺—町名の変遷—』リーフレット京都212、(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館
- ・ 平尾政幸2008『平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2007-11、(財)京都市埋蔵文化財研究所
- ・ 平尾政幸2019『土師器再考』『洛史』研究紀要12、(公財)京都市埋蔵文化財研究所、9-56頁
- ・ 藤田達生2010『証言 本能寺の変—史料で読む戦国史—』八木書店
- ・ 松井忠春1984『押小路殿跡第2次調査』『押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告書12、財団法人古代学協会、2-51頁
- ・ 森田克行1984『屋瓦』高槻市教育委員会編『摂津高槻城跡 本丸跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第14冊、129-142頁
- ・ 森島康雄2009『土器・陶磁器編年と城の年代観』峰岸純夫・萩原三雄編『戦国時代の城—遺跡の年代を考える—』高志書院、159-188頁
- ・ 山口誠司2018『織田氏関連城郭・寺院における同範・同文・同系瓦の再考—本能寺跡出土資料を中心に—』『実証の考古学—松藤和八先生退職記念論文集—』同志社大学考古学研究室編、705-717頁
- ・ 山崎信二2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報59、奈良国立文化財研究所
- ・ 山崎信二2012『瓦が語る日本史 中世寺院から近世城郭まで』吉川弘文館
- ・ 山田邦和1994『左京全町の概要』(財)古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店、187-310頁

- ・ 山田幸一1981『壁』ものと人間の文化史45、法政大学出版局
- ・ 山田幸一1983『日本壁』建築技術選書36、学芸出版社
- ・ 山本雅和 2008a「平安京左京四条二坊十五町跡・本能寺城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局、54-73頁
- ・ 山本雅和 2008b『「本能寺の変」を調査する』リーフレット京都231、(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館
- ・ 吉川義彦ほか 2008『本能寺跡発掘調査報告・平安京左京四条二坊十五町』関西文化財調査会